AMON MIYAMOTO 宮本亜門

公開対談シリーズ第７回

NINAGAWA 千の目

第７回の「千の目」は演出家の宮本亜門さんが登場。
共に海外でも活躍する演出家同士という組み合わせは、とてもエキサイティング。
普段、共に仕事をする機会のないだけに、とにかく互いに聞いてみたい話が尽きない。
欧米での仕事のやり方の違いから死生観やおたく話まで、本音で語った対談は、
鋭いつっこみ満載の刺激的なものとなった。

蜷川幸雄 YUKIO NINAGAWA

まずディスカッションが、欧米では仕事の基本

蜷川（以下N）　「NINAGAWA 千の目」シリーズ、第７回のゲストは宮本亜門さんです。ブロードウェイで日本人として初めて演出した演出家で、言ってみれば僕のライバルです。宮本亜門さんです。（拍手）　ここに来るのが嫌だったでしょう。

宮本（以降M）　その通りです。はじめの紹介でライバルとか言わないで下さいよ。ホントやりづらいですよ。演出家って怖いですね。

N　ニューヨークで『太平洋序曲』を演出しましたよね。もちろんアメリカ人の俳優さんでしょ。どうでした？

M　とにかく稽古時間が３週間以内で短かかったので、「これは間に合わないのではないか」という恐怖感があって、まず稽古の最初の一週間ぐらいは「はい、始めましょう。一番上のここから……」と動きをどんどんつけていったら、5日後ぐらいから彼らが完全にフラストレーションを抱えているのが分かって「ヤバイ」と思ったのです。つまり「あなたに動かされる駒ではない」と。舞台監督に「亜門、ちょっとやり方が違うのではないの」と言われ、「ああそうか」と気づきましたね。自分が焦っていたんです。

その後からは稽古はまず話し合いからで、「僕はこのシーンをこうしたいがどう思う」という事をディスカッションして、その後動きについて「僕はこう思う」と言ってやっていくようにしました。

N　イギリスでは稽古の始め方からディスカッションした。日本では手をたたいて始めるが、イギリスでは「では、始めましょうか。あなた達がいい時に始めて下さい」と言われて自然に始めます。「どっちにしようか」とみんなでディスカッションした結果、「僕らは蜷川のやり方でやってみよう」と決まった。亜門さんもディスカッションをしたとおっしゃったが、その通りなんだよね。

M　ですね。

N　もう、理屈ばかり言っているでしょう。うるさいでしょう。

M　そう、うるさい。僕は日本に帰ってきて、本当に日本人ってなんて静かな、なんてよく言うことを聞いてくれるのかと思いました。

N　外国から来た演出家が日本で仕事をしたがるのが分かるよね。日本人である亜門が自分達の土俵でない所でやる大変さはありましたか。

M　あると思って行ったらそれほどなかった。初めて稽古場に来てみんなと顔合わせがあって、もっと演出家らしい言葉を「この作品は、こうでこうで」としゃべろうと思って準備していったが、結局みんなの前に立った時に自分の意思とは関係なく言い始めてしまったのです。みんなのニコッとした顔が見たくなって、「（英語で）僕は（猿のマンガの）キュリアス・ジョージに似てるって言われてるんだけど」と言うとみんなが笑って……。

N　ばかじゃない。

M　そう、ばかなんです。まずばかを出すんです。ばかを見せてその後みんながワーッと言った時に、「実は僕がやりたいのは、こうでこうで……」と言う時にすごい幸せを感じるタイプなんですよ。

N　利口に見えるように、値打ちを高くするためにまず落としてみせるんだ。

M　そんな計画的ではなく、なにかスイッチが入ってしまうんです。僕は喫茶店の息子で、サービス業で父も母も生きてきて、「いらっしゃいませ」と言う時の笑顔が好きで幸せになるタイプなんで。

本当に蜷川さんがいらっしゃったことによって、何百回、人に「灰皿を投げないのですか？」と聞かれました。その度に、「俺はこの童顔だし、演出家にはなれないな」というコンプレックスがあったんですよ。

N　可愛いと言うことだな。

M　そう。（笑い）　だって、蜷川さんと比べたら……ね。（笑い）
蜷川さんのお蔭で笑顔が好きな自分は演出家になれないのかなって、ずっとコンプレックスがありました。

N　俺はコンプレックスはなかったと思うが、お互いに演劇界にいて、少し孤立している所があるよな。

M　この前蜷川さんが「僕は演劇をやっていく上でいろいろな人と戦いながら革命をしてきた。それは色でいうとモノクロ、白と黒でぶつかってきた。お前のむかつく所は七色でぶつかっている所だよな」とおっしゃいましたよね。

N　うらやましいんだな。

NINAGAWAもソンドハイムもいい意味でのおたく

M　蜷川さんの舞台をずっと拝見していて、本当に日本の演劇界の中で見事に孤立し、自分の道を進み、それがいま世界になり、もっとも最大級の演出家にまでになったというのはすごいですよね。

N　最大級までもうちょっとなのですけれど。

M　何が最大級ですか。

N　前はそういうことにちょっと興味があったが、この頃はぼけ老人でどうでもよくなった。

M　いつから？　ぼけが、ではなくて、どうでもよくなったのはいつからですか？

N　ここ2年ぐらい。言ってみれば俺は“おたく”なんだと思うんだよ。演劇おたく。今（1月時点）、昼間は『コリオレイナス』の稽古をやり、午後3時過ぎから『ひばり』の稽古と2つやらせてもらっていて、みんなが「大変でしょう」というが、自分では苦ではないわけで、いってみれば「カツ丼を食った」「こんどは天丼だ」という感じなんだよ。

M　すばらしい。

N　そのことだけに興味があるんだよ。演出家としてのそびえ立つような権力が欲しいとか、演劇の賞が欲しいとかは別にないし、だいたいもらったし。

M　何かむかつく。（笑い）　僕はもらっていないんですから。

N　もらえないの。

M　あまりもらえないタイプなんです。
“おたく”で思い出したけど、僕がブロードウェイでやった『太平洋序曲』の作曲もした、僕の大好きなスティーブン・ソンドハイムという70歳半ばの作曲家も「おたく」です。結局ほかのブロードウェイの作曲家とかもそうだけど、彼らは人間的にいい意味でおたくで、もうなにかに夢中になって

photo:幸田 森　構成: 鴨澤章子